

長野県立歴史館たより

2025年 秋号 vol.124

特集

疫病退散！

除災祈願の考古学

（木製祭祀具にみる古代の祈り）



疫病退散! 除災祈願の考古学

~木製祭祀具にみる古代の祈り~

飛鳥時代・奈良時代の災厄と祭祀

7世紀後半から8世紀前半の飛鳥・奈良時代といえば、律令という法律に基づく中央集権型の律令国家体制を目指し、さまざまな改革が行われた時代です。律令以外では仏教文化も大陸から伝わり、現在に残る仏像や工芸品からは華やかな雰囲気を感じます。しかし、『日本書紀』や『続日本紀』などによれば、度重なる疫病の流行や自然災害が人々を襲った時代でもありました。

近代科学が発達する前は、そうした災厄に立ち向かう方法の一つとして祭祀が行われたと考えられており、全国の遺跡から土器や土馬などの土製品、鈴などの金属製品、^{いくし} 斎串や^{ひとがた} 人形などの木製品といった多様な祭祀関連遺物が見つかっています。それらは都城や官衙といった役所的な性格を持つ遺跡から見つかることが多く、一説には、国家による全国的な祭祀統制や天皇の名による祭祀の執行があったとされます。また、古墳時代由来の祭祀と、新たに大陸から導入した祭祀が組み合わさって、当時代の祭祀が成立したとする説もあります。祭祀は、時代の流れの一端をうつしており、さらに都と地方の関係性を考える上でも重要

なテーマなのです。

今回の展示では、木の板や棒などを加工した「木製祭祀具」を対象として、主に古代の科野国・信濃国における人々の祈りについて考えます。

屋代遺跡群からみる古代の祭祀

古代の役所の一つである「^{はにしなぐん} 埴科郡衙」との関係を示唆されている千曲市屋代遺跡群では、^{やしろ} 上信越自動車道建設に伴う発掘調査で大量の木製祭祀具が出土しました。千曲川の旧流路が埋もれかけた自然流路跡や、その流路に向かって人工的に掘り込んだ溝跡が数条存在する地区で、いくつかのまとまりをもって祭祀具が廃棄されていました。その期間は7~9世紀にわたり、特に7世紀末から8世紀初頭に出土量のピークを迎えます。

こうした様子からは、特定の水辺（斎場）において長期間にわたり、祭祀を行い、祭祀後に道具を廃棄する（片付ける・水に流す）行為があった可能性が考えられています。

屋代遺跡群で見つかった木製祭祀具には、地面に刺して結界を表すと言われる「斎串」のほか、人や動物（馬・鳥など）、武器や農具など、さまざまな思いを込めてつくられた形代^{かたしろ}があります。そのうち「蛇形」とされる一群は、屋代遺跡群独自の祭祀具であると言われています。

時代別にみると、7世紀後半は斎串と馬形や蛇形^てのセットを主体とし、さらに古墳時代由来の手^{づく}捏ね土器や滑石製の玉類^{かつせき}などが共伴するという特徴があります。役所の設置という新たな政治体制下にありながらも、祭祀は前時代の色を残しているのです。8世紀になると、木製祭祀具では斎串のほかに人形が多く見られるようになり、前時代的な玉類などは姿を消します。



千曲市屋代遺跡群出土 木製祭祀具

上：馬形 中央左から：馬形・人形・斎串 下：蛇形（当館蔵）

都の祭祀と地方の祭祀

現在の奈良県に築造された藤原宮（7世紀後半～8世紀初頭）、平城宮（8世紀）から出土した木製の人形や馬形には、顔や体の線を墨で描いたものが多く見られ、それらを線刻で表現する屋代遺跡群とは差異がありそうです。また、伊那郡衛（いながんが）であると考えられている飯田市恒川官衛遺跡（7世紀後半～10世紀前半）で出土した人形・馬形や斎串などは、時代による差異の可能性もありますが、厚みや形に屋代遺跡群のものとはやや異なる傾向が見られます。除災を祈るという行為は共通する一方で、祭祀具の作り方や細かな情報の伝わり方には都と地方、また、地方のなかでも遺跡ごとにバラエティーがあった可能性が垣間見えます。



平城宮跡出土 木製祭祀具
(奈良文化財研究所平城宮跡資料館蔵)

古墳時代中期（5世紀半ば）の屋代遺跡群や飯田市辻前遺跡では、溝や竪穴から、刀形や舟形などの木製祭祀具が見つっています。当時代の祭祀遺構として、木樋（もくひ）などを利用して水を引き入れる水路、貯水、排水施設が報告されることがあり、こうした施設において首長が執り行う水の祭祀が展開したのではないかといわれます。祭祀具や施設の一部は、古代へも引き継がれています。

律令体制以前 古墳時代の祭祀

飯山市釜淵遺跡（かまぶち）では、永仁四年（1296年）の紀年銘とまじないの言葉「^{きゅうきゅうよりつりよう}急々如律令」の文字が記された呪符木簡が、鳥形木製品などと一緒に出土しています。また、千曲市東條遺跡（ひがしじょう）では「蘇民将来子孫人（家）」と墨書きされた木簡（13世紀後半から14世紀か）が見つかり、現在の長野県上田市信濃国分寺の八日堂縁日で頒布される「^{そ みるしやうらいふ}蘇民将来符」につながる、蘇民将来信仰の県内最古級の事例ではないかといわれています。これらの資料は、穢れや災禍が侵入することを防ぐ護符のような意味を持ち、「境界線」を意識したまじないの形が存在していたと想像されます。

「急々如律令」や「蘇民将来」は中・近世の呪句に多数使われており、現在も全国各地に蘇民将来符が残っていることから、人々に祈りの形態が浸透している様子がうかがえます。



蘇民将来子孫人（家）

千曲市東條遺跡出土 木簡「蘇民将来符」
(当館蔵)

疫病退散！除災祈願の考古学

祭祀や祈りの形態は、前時代の特徴を引き継ぎながらいくつかの要素や系譜が混ざり合って変化していきます。その道具や執行方法はさまざまであるものの、根本にある、^{さいやく}災厄から身を守り、命をつないでいきたいといった人々の願いを感じていただければ幸いです。

(杉木有紗)

水戸浪士追討軍と信州の人々

～「浮浪士追討御印状并廻文写帳」～

1864年（元治元年）は、池田屋事件や禁門の変、佐久間象山の暗殺など、幕末の混乱を象徴するような出来事が次々と起こった年です。中でも信州の人々に衝撃を与えたのが水戸浪士の行軍です（^{てんぐとう}天狗党の乱）。同年3月に筑波山（現茨城県つくば市）に挙兵した水戸藩の天狗党は、朝廷や徳川慶喜に攘夷を訴えるため京都を目指し行軍（西上）を開始します。信州へは同年11月17日に入り、20日には和田峠（現長和町・下諏訪町）にて松本・高島藩連合軍と衝突、これを破り伊那路を進みます。その後、木曾、美濃へと進みますが、最後は越前国（現福井県）で加賀藩へ投降し、幕府軍へ引き渡された後、多くの者が処刑され悲惨な最期を迎えました。

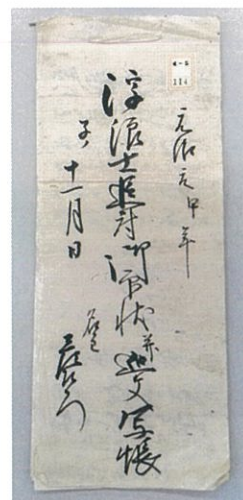
和田峠の戦い直後の下諏訪宿や、平出宿（現辰野町）では、人々が家財道具などを片付け避難しました。松島宿（現箕輪町）では、宿場を焼き払われては困ると、恐る恐る止宿させることを決めました。水戸浪士の行軍は信州の人々に恐怖と混乱をもたらしました。これに追い打ちをかけたのが幕府による追討軍です。^{おきたか}田沼意尊（^{げんぼのかみ}玄蕃頭）を総督とする追討軍は、浪士軍や各藩の対応の様子を聞き取る程度で、浪士軍から概ね2日遅れた距離を保って後を進んでいました。11月23日付で平出宿の名主が出した文書に、追討軍が24日に800人、25日も800人、26日には1000人通行するため、その継立に同等の人足を用意するよう幕府から達しがあったことが記されています（『辰野町誌』歴史編）。この膨大な人足の確保のため、高遠藩は周辺の村々へ可能な者は一人残らず平出宿へ集まるよう触書を出しています。

この追討軍の行軍による混乱を示す文書の一つに、伊那郡中坪村（現伊那市）の名主が^{かいぶん}廻文を写した「浮浪士追討御印状并廻文写帳」があります。

それによると、北殿・大泉両宿（現南箕輪村）の間屋と年寄は、田沼玄蕃頭率いる追討軍のための人足を要請する印状が大井三郎助（勘定方）から届いたことを、近隣の村々へ25日付の廻文で知らせています。また総勢2400人の人足を村々の石高に合わせて負担するとし、中坪村は75人と記されています。一方で北殿・大泉両宿は追討軍の通行が延期になったため、25・26日の人足を見合わせるよう伝える廻文も出しています。それとは別に、下諏訪宿から平出宿宛での急状の写しとともに、追討軍の大久保帯刀等が江戸へ戻るためその分の人足は不要であるとする廻文も25日付で出しています。続く27日付の廻文には、同日に大砲方・夏目清太郎が通行することが伝えられ、急なことなので人足が間に合わない場合は、近村にて対応するよう達しています。さらに続く廻文には、28日の歩兵指図役・安藤幸四郎の通行が伝えられ、昼12時頃までに松島宿へ人足を出すよう達しています。

このように25日から28日と追討軍の行軍にともなう人足関係の廻文が続きますが、直前になって来ないと伝えられたり、当日になっていきなり来ることが伝えられたりと、追討軍の動向に振り回される様子がうかがえます。水戸浪士と追討軍の行軍は、信州に大きな混乱を与え、幕府に抵抗する勢力がいること、それを幕府や諸藩が制圧できないことを知らしめ、時代が動いていることを感じさせる出来事でした。

（新井寛子）



浮浪士追討御印状并廻文写帳
伊那郡中坪村文書
（当館蔵）

黒曜石の表面に観察された「運搬痕」

県立歴史館の収蔵資料に、高速道建設で発掘調査が行われた信濃町野尻湖遺跡群の旧石器時代資料があります。

写真1は、貫ノ木遺跡第3地点から出土した石核です。左が長さ約13cmで重さ約740g、右が約540gです。いずれも約3万年前の遺物集中（ブロック）から出土しました。ただこの2点の石核は遺跡内でも黒曜石製としては最大級の大きさで残されていました。表面をよく観察すると、角や高まり（稜線）上などに磨耗が見られます。その磨耗は剥片を剥いだ剥離面やその稜線にも見られます。その磨耗痕のできた意味は以下のように推察されます。黒曜石の原石を求めて和田峠周辺まで訪れた貫ノ木遺跡の旧石器人は、山腹から河床にある黒曜石の転石を探し求めます。そこで、石器の素材として持ち帰るのに適切な原石を選択するために試し割りを行ったようです。転石は表面が磨滅して、すりガラスのようになり、質の良し悪しがわかりにくくなっています。そこでかれらはその転石をすこし打ち割ります。写真の光沢をもった剥離面が形成されます。良質と判断された転石は、おそらく革袋のような入れ物に入れて、野尻湖まで運ばれたのと思われます。その道すがら、採取した石同士が皮袋の中でぶつかり

合い、擦れた結果が、写真の石核の表面にみられた擦り傷で、それを「運搬痕」といいます。つまりこの石核は、原産地で試し割り行い剥離面が形成され、有効な石材と判断され貫ノ木遺跡まで持ち運ばれたと理解できるのです。

一方、約2万年前の貫ノ木遺跡第1地点から発見された黒曜石製の槍先形尖頭器の表裏稜線にも同様の「運搬痕」が認められます（写真2）。槍先形尖頭器は製作途中で破損するリスクが高いため、ある程度まで原石がすぐ採取できる原産地で製作をし、野尻湖までもたらされたようです。本来ならばこの2点も貫ノ木遺跡で仕上げの工程になるはずでしたが、何らかの原因でその工程を経ず遺棄されたようです。また、原産地の長和町鷹山遺跡群S地点では大量に槍先形尖頭器が製作された跡が見つかることから、原産地で盛んに石器製作をおこなっていたことがうかがわれます。

貫ノ木遺跡の黒曜石の表面の「運搬痕」観察により、3万年前は原石を採取し持ち込んだことが、2万年前には原産地で加工された石器がもたらされたということがわかり、黒曜石流通のあり方の違いを読み取ることができたといえるのではないのでしょうか。

（大竹憲昭）



写真1 貫ノ木遺跡出土 石核（当館蔵）



写真2 貫ノ木遺跡出土 槍先形尖頭器（当館蔵）

夏季展

「安曇野～知られざる里山の祈り～」を ふりかえって



4月18日、大町市八坂で震度5の地震が発生し、覚音寺蔵の重要文化財である持国天像が破損しました。千手観音像と多聞天像については損傷がないことを確認し、他の仏像を含めて展示方法や配置などの安全対策について再検討し、いよいよオープンの運びとなった次第です。

千手観音を観覧されたお客様から「穏やかなお顔をされていますね。平安時代のもものと出会わせていただけるなんて幸せです。」「胎内物を入れる文化がこんな山深くまで来ていたことは驚きです。それが今もこの千手観音様の中に入っているなんて信じられない。すごい。」などのお声をいただきました。

覚音寺では、破損した持国天の再生に向け、緊急募金を行っていますが、支援をお願いするチラシを多くの方にお持ちいただきました。今回の地震を機に、文化財の存在意義を改めて考えさせられることとなったのは、我々博物館職員のみならず、観覧された皆様も同じであったことを強く感じました。地震大国日本において、文化財を守り継ぐことの重みと、感謝、そして自然災害と共に生きる覚悟を新たにしたいと思います。

今回の安曇野展は、知られざる里山の祈りとい

う副題です。縄文時代の祈りについて、大町の異形部分磨製石器の祭祀具から始まり、餓鬼岳や有明山、鳥奴等への自然信仰、満願寺におけるあの世への祈りの世界を、江戸時代の祈りについて霊験あらたかな祈りの地として多くの人で賑わったという満願寺・松尾寺・明王院（正福寺）、さらには松本藩による廃仏毀釈の実態を哀敬儀という神葬祭の指導書から見ていただきました。

これらを通して安曇野には一つの共通した文化の営み、信仰空間があったことがみえてきます。そして、これからの未来を考えるにあたって、その歴史を我々が知っておくことは必ずやプラスとなって働くものと思います。

同時に大足の毘沙門堂のように、その地域ごとに小さな信仰空間があったことも忘れてはなりません。

「記憶の中にこそ、我々みんなの希望がある」とは作家でノーベル平和賞を受賞したヴィーゼルの言葉です。安曇野に残る知られざる祈りの世界から感じていただいたことをこれからの皆様の生活に生かしていただけたら幸いです。



貴重なお像や所蔵品を貸与していただきました寺院や機関ならびに個人の方々の御協力に改めて心より御礼申し上げます。
(小林寿英)

小菅神社とは ◆◆◆

飯山盆地の東、小菅山の中腹に位置する小菅神社は、明治時代の神仏分離までは小菅山元隆寺こすげさんがんりゅうじといい、戸隠山・飯綱山と併せて奥信濃の三大修験場として隆盛を誇りました。

小菅山の創建年代は判然としませんが、1542年(天文11年)の年記がある「信濃国高井郡小菅山八所権現元隆寺来由記」によると、仏法を広めるのに相応しい地を求めて諸国を巡っていた修験道の祖・役小角えんのおずめが小菅山に出会い、680年(白鳳8年)に小菅権現(馬頭観世音)をはじめとする八所権現(熊野・金峯・白山・立山・山王・走湯・戸隠)を祭って小菅山を開山したことが始まりとされています。また、東北出兵の折に参拝し戦勝を祈った征夷大將軍坂上田村麻呂が、凱旋後平城天皇の806年(大同元年)にその報賽として八所権現の本宮と加耶吉利堂を再建したほか、元隆寺を建立し、諸塔堂を整備したといいます。



木造馬頭観音菩薩像
県宝(飯山市 小菅神社蔵)

隆盛期を迎える小菅 ◆◆◆

「略縁起」によると、1197年(建久8年)に源頼朝が善光寺に参詣した時、小菅山にも参詣し多くの庄園を寄進したことで、僧侶の数が200人を超えたといいます。小菅から出土した珠洲焼すずや越前陶器などは13世紀後半～15世紀のものとされ、能登半島や越前などと交易する人々がいた証であり、日本海側で作られた焼き物がこの地に多くもたらされたことから、小菅の繁栄をうかがうことができます。



絹本着色両界曼荼羅図 金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅
県宝(飯山市 菩提院蔵)

長野県宝に指定された菩提院の曼荼羅は、本来元隆寺に伝わったもので、畿内で中国から輸入した絹地に描いたもので、時代的にも鎌倉時代後期～南北朝時代の製作と推定されています。この曼荼羅からも小菅の繁栄をうかがうことができます。

室町時代には何度か焼失の憂き目に合いながらも復興しています。1422年(応永13年)には、加耶吉利堂が建立され、堂内には近隣の土豪らによって著色観音三十三身板絵(応永年間在銘)が寄進されました。1430年(永享2年)からは4年の歳月をかけて、元隆寺の宮社坊中寺観が再建されました。1508年(永正5年)9月には、奥社内の宮殿が建立され、1546年(天文15年)には、桐竹鳳凰文透彫奥社脇立二面が製作されています。これらの記録からすると、16世紀の半ばまで、小菅山では造営が営々と続けられており、それを可能にするだけの繁栄があったことがうかがえます。

「小菅の里及び小菅山」が国の重要文化的景観に県内2例目の地域として2015年(平成27年)の選定から10年が過ぎました。山深い北信濃で変化しつつも受け継がれてきた信仰の場、残された貴重な文化財、自然環境を活用した生活と生業は、長野県を形作る地域史の一端です。展示・発信することによって、地域の魅力を再発見してもらい、今後残していくべき地域の在り方を考えるきっかけにしていだけたらと思います。

(黒川 稔)

INFORMATION

インフォメーション

■2025年(令和7年) 9月～12月の行事予定

9月

企画展・所蔵品展

休館日
1・8
22・24
29

9月8日(月)～9月18日(木)は
全館くん蒸のため休館となります。



講座・イベント

県立歴史館講座③

9月6日(土) 13:30～15:00

「信州の旧石器を掘る！」

鶴田典昭氏 (おぶせミュージアム・中島千波館長)

古文書講座

上級 第5回 9月27日(土)

歴史館出前講座② IN大桑村

9月27日(土)

10月

秋季企画展

休館日
6・14
20・27

疫病退散!

除災祈願の考古学

～木製祭祀具にみる
古代の祈り～

10月4日(土)～11月16日(日)

講演会

10月4日(土) 13:30～15:00

「古代の人形に込められた祈りと呪い」

～平城宮出土資料を中心に～

講師：浦 蓉子氏

(奈良文化財研究所主任研究員)

講座①

10月25日(土) 13:30～15:00

「屋代遺跡群の調査と木製祭祀具」

講師：水澤教子 (当館総合情報課長)

講座②

11月9日(日) 13:30～15:00

「蛇行剣に関わる祭祀」

講師：児玉利一氏

(諏訪市博物館学芸員)

講座③

11月15日(土) 13:30～15:00

「現代に続く祓いと祈願」

講師：櫻井秀雄 (当館考古資料課長)

イベント

10月19日(日) 13:30～15:00

かりうち大会 ※双六のようなゲーム

考古学体験講座①

10月11日(土) 13:30～15:00

古文書講座

初級 A 第5回 10月19日(日)

B 第5回 10月16日(木)

中級 A 第5回 10月18日(土)

B 第5回 10月16日(木)

古文書出前講座⑤

IN諏訪市立博物館

10月26日(日)

考古学体験講座②

11月1日(土) 13:30～15:00

開館記念日 (森將軍塚まつり)

11月3日(月・祝)

須坂市民の日

11月8日(土)

古文書フォローアップ講座

11月8日(土) 13:30～15:00

歴史館出前講座③

11月8日(土)

クリスマスリース作り

11月29日(土)

11月

休館日
4・10
17・25

12月

休館日
1・8
15・22
28～1/3



近世史セミナー

12月6日(土) 13:30～15:00

県立歴史館講座④

12月13日(土) 13:30～15:00

考古学体験講座③

12月14日(土) 13:30～15:00

表紙写真の解説

千曲市屋代遺跡群の木製人形

(当館所蔵)

7世紀末～8世紀前半に埋没した溝跡から、斎串・人形・馬形がまともに見つかりました。人形は薄い木板に刃物で切り込みを入れて、頭・胴体・腰のくびれ・手足などを表現しています。目や口など顔の造形も、切り込みにより表現されています。写真の人形は、つくり方や大きさ、形がよく似ていることから、同じ作者によるものではないかと想像できます。

行事アルバム

***** 歴史館で夏休み *****



8月2日(土)は歴史館で夏休みということで、各種イベントが行われ、多くの家族連れにご来館いただきました。縄文人になろうでは、麻などの植物で作られた縄文服を身に付け、本物の土器などを持って縄文人になりきり、写真を撮って盛り上がっていました。歴史発見隊では、切り取られた写真をヒントに正解の展示資料を熱心に探していました。記念の首飾りを嬉しそうに身に付けている姿が印象的でした。

***** 古文書講座 *****



今年度も恒例となっている古文書講座が行われ、初級・中級・上級・ティーンズを合わせて200人程の方々が熱心に受講されています。さらに今年は、当館だけでなく、諏訪市博物館でも初級の講座を出前で実施しました(写真)。参加者の皆さんは、文字の読み方や当時の時代背景などの理解を深めたり、関連事項に興味を持ちもっと知りたい!と意欲を高めたりと、それぞれが学ぶことを楽しんでいました。11月にはまとめとして全コース共通のフォローアップ講座が講堂にて予定されています。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.124

2025年(令和7年)8月28日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 有限会社アツツーロ